

四季
部類

俳諧歳時記新葉草

上





四季都新
依然歲時記
新 梁華

山口書局 函購 四

京都 新川舎 山口 新

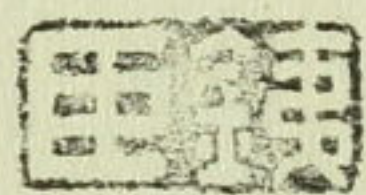
水



中

福珠

明治十四年冬
如彦山人題



古心在陸地
 通學在山水
 口

○ 邑 齋 通 樞 考 之 像



初三

版 權 所 屬
 京 畿 書 舖
 鳳 凰 堂 記

昔の集り十巻

夕立や田を三田の
神しあうハ

瘦る身を
其角

瀧畔や
秋の風
有雪

一軍一に
其考

都の雪を
儒士ののり

本箱こそ川ある

桐のまゝ紫うな
洋云

雪のまじりうへを啼
物外
大草



越へるもゆへも
去来

あまの燕うら

松を渡る

人すつらうの

遠くうら
神坡

破鐘のけまのこ

雪し文け

月
止枝

新顔や

そのく目乃
杉風

余のまじり集り冬
の柳黄
裁人



頭箋 標目

四季部類

月毎に乾坤植物生敷神歌衣食等事一類を分るる所を
圖を稱し此の所合する所の古今名家の句を掲ぐ所なり
二の卷よりつづき七十八丁より

名目拾遺

七十九丁

一卷之式

賦物日丁

和漢之事

八十丁

万句千句十百韻

八十二丁

百韻之式

日丁

米字之式

日丁

七十二候之式

日丁

易之式

日丁

源氏之式

八十三丁

五十韻之式

日丁

四十四之式

日丁

歌仙之式

日丁

長歌行之式

日丁

短歌行之式

日丁

十八公之式

日丁

首尾之式

八十三丁

表合之式

日丁

發句照第三之事

八十三丁

四句目之事

日丁

月花の定座

八十五丁

去嫌大意

日丁

句數

考嫌

八十六丁

季節之跨物

八十八丁

嫌古式八條

八十九丁

指合之事

九十三丁

云花之事

九十七丁

戀之詞

九十九丁

切字之事

百七丁

發句之格

百十三丁

押字抱字之格

百十丁

執筆法式

同丁

附合之事

百十八丁

七名八体之事

日丁

發句之編附

事

百廿丁

同第三附

事

百廿四丁

文字留芽三之事

百廿六丁

卷中連綿之事

同丁

名所地名違附之事

百廿五丁

疊語之事

日丁

和歌諸風体

百廿六丁

短哥

日丁

旋頭哥

日丁

混本哥

百廿七丁

廻文

日丁

依諧哥

日丁

折句

百廿八丁

折句香冠

日丁

物名

日丁

贈答

日丁

蕉翁古池之句

百卅丁

同遺稿

百四十二丁

名所地名

少字

二字之部

百四十七丁

三字之部

百四十九丁

四字之部

百五十四丁

五字之部

百五十八丁

年賀之稱

百六十二丁

追善年忌之稱

日丁

俳諧七部集

自百六十三丁

至二百七十四丁

附録

俳諧之字義

俳諧連歌之權輿

并俳諧風体之詩

俳諧之大意

標目終

四季部類

○一月之部

元朝 元日 鶏旦 改旦

素節 素首 上旦 正朔

聖節 去君 展端 之元

初空 初鳥

初鶏 初鳥

初明 初鳥

初夢 初鳥

初降

四季

俳諧歳時記新纂

俳諧歳時記新纂 卷之一

京都 山口素楊編輯

一月の院拜禮 大府記延久五年正月元日辛巳院拜礼午刻諸卿

以下參集次並畫御座庇御簾開次御出直御裝次
關白前太政大臣右大臣并大納言中納言參議以上
一列庭中次殿上四位以下別當判官代
等一列拜舞了之後從上薦次第退略記 嚴鳴

祭 國幣中社多神ハ市井多産令あ蘇の
玉依伯耆あり毎年二月下の亥日神を行
ハリ此下下の亥日しを二月初の申日也十
日の日、奉幣使渡海七度半の使 寢積

寢舉 寢と稱し初訓同キ故年祝語とナリ此
後も奉り又稱の縁起あり 芋頭 芋が
らを

一月 歳旦

改	新	若	四	朝	氷	園	院	内	を	き	改
年	年	年	方	方	の	柄	の	慶	は	立	年
年	年	年	年	年	様	奏	祥	年	き	之	年
年	年	年	年	年	七	玉	禮	年	き	の	年
年	年	年	年	年	曜	人	儀	年	き	の	年
年	年	年	年	年	内	玉	年	年	き	の	年
年	年	年	年	年	酉	福	年	年	き	の	年
年	年	年	年	年	酉	年	年	年	き	の	年
年	年	年	年	年	酉	年	年	年	き	の	年

破菜摘 破色の菜 飯肴 和漢三才圖會云
 凝かへる 字彙云凝氷堅也
 居籠 庚祭十日 神社の虫也
 紙鸞 紙老鴿 風巾
 兼三春物 杜詩 落花遊糸白
 糸遊 杜詩 落花遊糸白
 腹赤奏 公事根原云腹赤の奏とて
 初空 千五百
 初鷄 御筆元

新	若	今	年	年	年	年	年	年	年	年	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年

紙鸞 紙老鴿 風巾
 兼三春物 杜詩 落花遊糸白
 糸遊 杜詩 落花遊糸白
 腹赤奏 公事根原云腹赤の奏とて
 初空 千五百
 初鷄 御筆元

初 多し 初 賣 川 買

初 荷 藏 屏

俗 室 初 吉 書 試 筆

書 初 吉 書 試 筆

羊 子 板 け 子 子 子 子

子 鞠 つ く 子 子 子 子

表 白 建 歌 三 物 建 歌

之 物 依 此 幸 福 壽 子

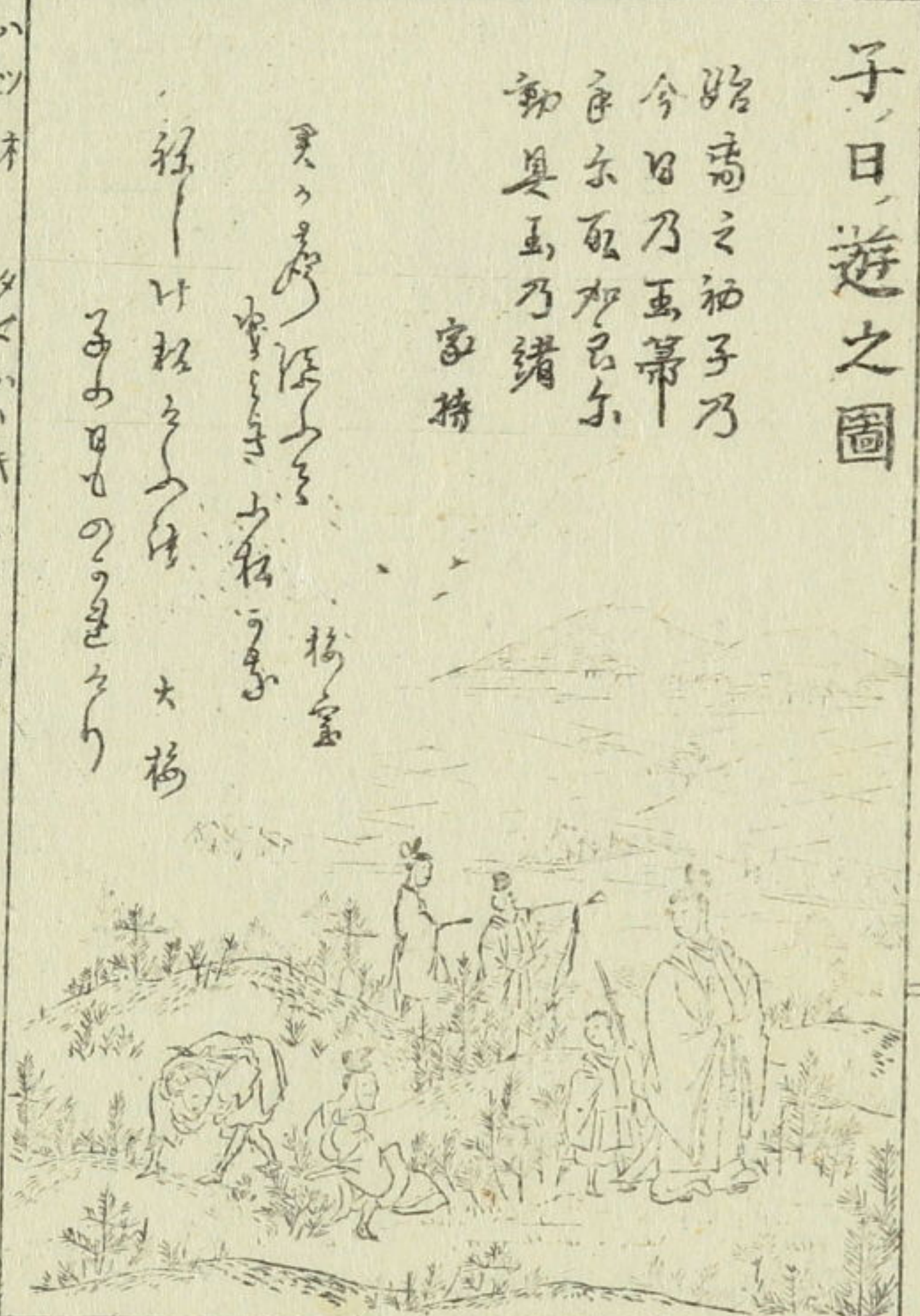
幸 籠 福 壽 子 毫

子 子 子 子 子 子 子 子

○ 旧 正 月 歳 旦 之 詞

子日遊之圖

略言之初子乃
今日乃玉第
子尔取尔尔
初是玉乃緒



初子の玉第

袖中抄玉第と著より草
子の月の初を引きて第

造り田家正月子の日と春朝
まの家を掃く初よりまの
初寅の日は
初寅の日は
初寅の日は

初卯 正月初卯の日
初卯の日は
初卯の日は
初卯の日は

立 春

明 の 春

子 代 の 春

四 方 の 春

三 の 七 の 春

歳 徳

門 の 神 柳

梅

桃

玉 子

球 打

喜 たり

子 代 の 喜

四 方 の 喜

三 の 七 の 喜

若 夷

星 を こ ぶ

懸 想 文

大 黒 神

鳥 居

球 打

初天神初子初

初子初は初子初
初子初は初子初

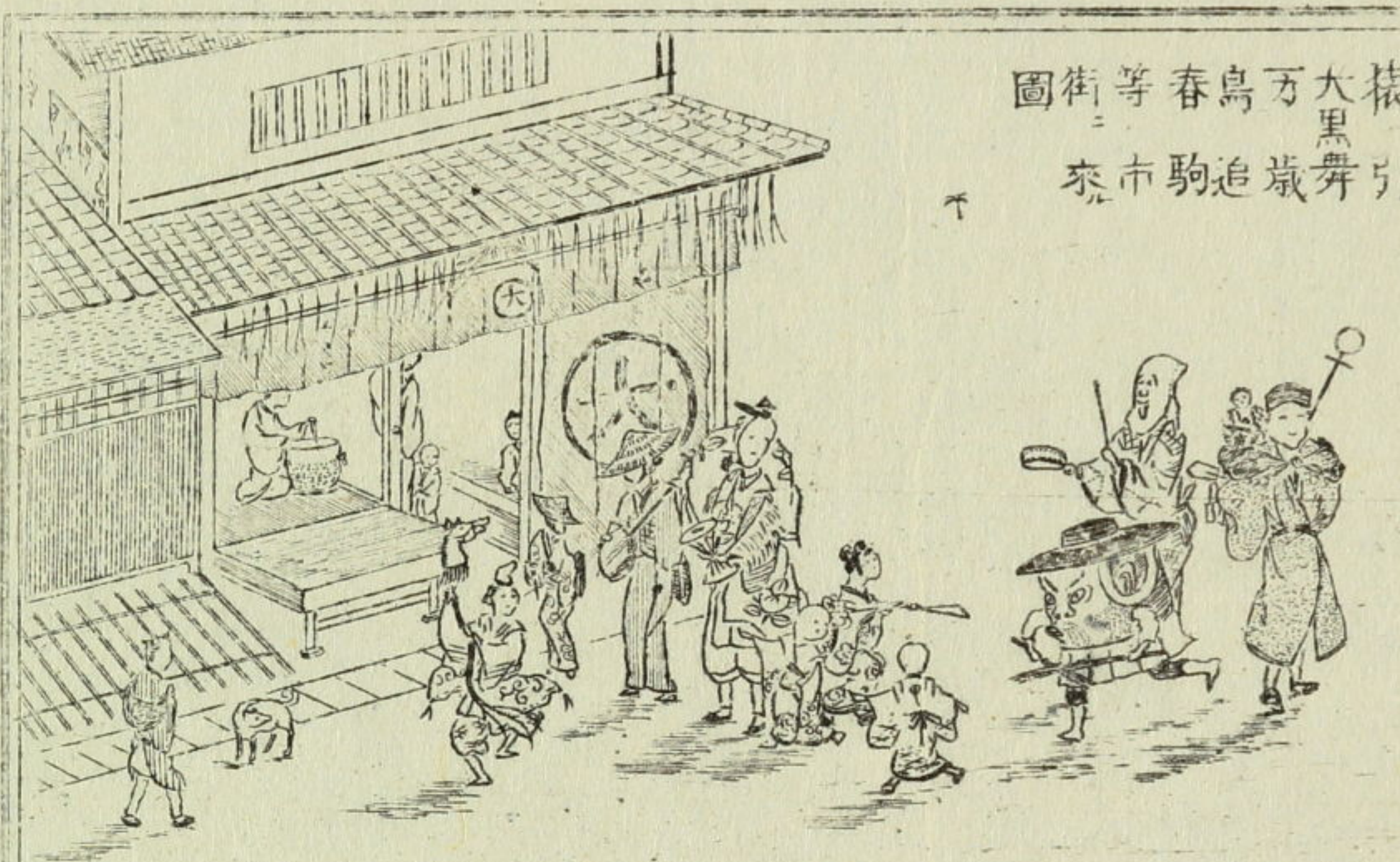
春樂

春樂は初子初
春樂は初子初

初演劇

初演劇は初子初
初演劇は初子初

大黒引 萬歳 鳥追 春等街 圖



男女も直快の具存よき春は芝居のすましき
く初芝居の今年すましき演劇興行を云
○本義以上の圖を照し古今の家と白掲載を
元禄時代より

蓬萊のすましき伴持のけん便 芭蕉
元禄のすましき伴持のけん便 嵐雪
年まににのすましき伴持のけん便 全
元禄のすましき伴持のけん便 全

天のすましき伴持のけん便 初月
法皇のすましき伴持のけん便 暁春
七のすましき伴持のけん便 芳村
若大のすましき伴持のけん便 大藏
けのすましき伴持のけん便 完末
若大のすましき伴持のけん便 完末

明法の家より
明治のすましき伴持のけん便
并華のすましき伴持のけん便
横又のすましき伴持のけん便
すましき伴持のけん便

玉打
破 六号
宝 三兮日
福 引

乾 引
初子の日
初演劇

卯つち
人日 七日
十四日年越

上 元 十五日
元夜 元霄

左 義長 爆 竹
位 蓮の内 杖

四 季 非 常 成 行 之 行 共 位

春 永 初春に三春の季
畑 打 畑をなす
春 宮 春宮

雨 春の雨
春の宮
春の宮
春の宮

春の川 春の川
春の川
春の川

春の山 春の山
春の山
春の山

花の山 花の山
花の山
花の山

新編 御言部 時記新草

燕

乙子やんぼ
燕の巣

雛子 帰馬

行馬 馬の別

馬 鳥

かほら馬 鳥

松江し馬 雀

雀の巣

引 鴨

鳥の巣 鴨

朝 鷹 白尾の鷹

継尾の鷹 佐保唯鷹

書乞猫。難談抄 此者陰黙より終る陽壽なり

子日夜 何れも子の日越す 子日越ハコ 初子の日出

な 菜摘川神車 神社啓蒙 勝子明神の社 大和國吉野川

内宴 公車根源 内宴と いうさくの節

七日四月 東方朔占書 四月一日を

馬七日を人日と云ふ ○人を帳貼せ 荆楚歲時記

七草 薺打。正月七日七種の毒草を食ふ七種 薺 薺 薺 薺 薺 薺 薺

伯 鷹 伯 符

鷹化して 符と成る

蟄 青 蟄

蟄 子 蛇

蟄 似 我 蜂

蟄 蝶

蛇 穴 出 石 籠 出

地 虫 穴 出 回 螺

馬 刀

馬 刀

馬 刀

四季 井踏歲時記新草

佛座 七種 世説故事 七種の葉をうつと正月七日多

く鬼車身は 常血を備ふ血を

てこれををふと 和俗七種を打て去唐土の多る日

板をうつハ鬼車身の止るをうつと 太平

廣記 鶴鶴ハ即 過く尤多し 人家に入り人の魂を奪ふ

常血を備ふ血を 淵らる家ハ凶邪なり

社 正月四日 流例とありて 故二枚をそへ 卵杖

中公車根源 御杖ハ持統天皇 四月卯の日 大學寮

後房府祝杖を執して 難談抄 今

世卯杖と云 加茂より 民家へおくるハ一尺 金の木

を白く割る 三光院御説 卯杖ハ魁 日物

二月 生類衣食神祝 一月 十四

曲水之圖



曲水之圖 此は昔の茶碗の 其角 酔不極李の詩人 龍白し 惜花不掃地 奴奴花を於餘汗し

わろく	弥生山	白桃	花	源平	桃	花	花	家	四季
竹	秋	花	花	花	花	花	花	花	花
行	暮	花	花	花	花	花	花	花	花
春	春	花	花	花	花	花	花	花	花
春	春	花	花	花	花	花	花	花	花
春	春	花	花	花	花	花	花	花	花
春	春	花	花	花	花	花	花	花	花
春	春	花	花	花	花	花	花	花	花
春	春	花	花	花	花	花	花	花	花
春	春	花	花	花	花	花	花	花	花

天照大神伊勢國五十鈴川上より神代の人形を學ぶと云ふ
野大根 西土の大小根相好
説文 苦水衣水土潤氣所生在水傍 ○青海苔 青海苔の如く
凝り石上生も青三四種有り 紫色を収る者も俗字
て神仙菜と云 ○沙草海苔 武江石川の邊に採る者も
佳味あり ○於胡海苔 海舟石上生も礼髪の如く
青色之古海苔多し ○櫻海苔 青波の國海苔
産も青色紅白梅の似たりは 相属も酢味噌で
浸し是を食ふ ○素麩海苔 長くして色青黒し
海苔類是なり ○鰯魚海苔 其狀鰯魚の如く
紅色して石うつきて生る ○黒海苔 若菜の海中
生る臘月これを産る 貞享式 此の如く裁の名産にて
海辺の岩間へ降積る雪を波の打浸す梅子にて
凝りて海苔と云れり ○真津海苔 廣さふて
分長さ五寸を頗る厚く色紫 ○葛西海苔
徳島の産 ○十六島苦
雲の産 其海苔の類

にせしむる官園一日、例年御題を布告し、
これに依りて宮内省へ上送するを許さし、
一月十八日を以て行り、
吟詠新軍の記載も、
お草 元朝 玉燭室典 正月一日、
尚書大傳 正月一日、
鮑宣傳 元日、
國柶奏 玉柶笛、
以醴酒、
皇而歌、
を奏する、
西陽雜俎、
今朝食、
鏡閑 乾事、
三月 乾坤植物、
十七

にせしむる官園一日、例年御題を布告し、
これに依りて宮内省へ上送するを許さし、
一月十八日を以て行り、
吟詠新軍の記載も、
お草 元朝 玉燭室典 正月一日、
尚書大傳 正月一日、
鮑宣傳 元日、
國柶奏 玉柶笛、
以醴酒、
皇而歌、
を奏する、
西陽雜俎、
今朝食、
鏡閑 乾事、
三月 乾坤植物、
十七

花 揚々名句

未仕幸之けも贈も揚々... 故主博考之の庭前とて... 花のほけしれ 信 貞 徳

花々... 花のほけしれ... 祖 木 雄 具 宝 鴨 札 更 村 士 更 雲 山 菜 鴨 札 更 村

て截とを忌む故... 截の字を 忘故あり

藏開

充て賣買の事を 要そ是終年 儼儼師

食摘

白作ももる... 食摘 今の俗語にて 蓮菜

蕪三春物

本朝食鑑 白久和井云 浅水中... 蕪三春物 慈姑

や 養父入

花燈夕 上元の条に出 海苔の条に出

近

花を... 花のほけしれ... 文 依 山 左 通 志 小 德 池 起 屋 節

Table with 4 columns: 人丸揚, 痛の尾, 雲珠揚, 揚々名, 吉神草, 太山府君, 褒美花

厄神祭

古一ハハ... 厄神祭 蘇民將來 山城國綴喜郡

山笑

民好... 山笑 蘇民將來 山城國綴喜郡

蕪三春物

柳

流毛... 柳 本草時珍曰 楊花枝硬く...

部類 三春終

三春終

四月支部

新玉の年

梅 天和清天

卯花 短夜

大矢 数蚊

汗 拭

扇 日

笠 五の里子

編 笠

洛東 大矢数之圖

月十番小豆粥を煮て天約の湯の湯中室上。和り別

新玉の年 璞の砥とついで年とついで枕餅あり

者如水沫故曰沫雪 葭灰飛 歳時記立春日取

以葭葦灰実律之端曆者候氣 阿さる 和漢三式

至則成飛而管通以迄六律 阿さる 國會正字

未詳俗云阿左利加比其形色恰爾 阿さる 阿さる

の一寸ふさとの四五分厚白也 阿さる 阿さる

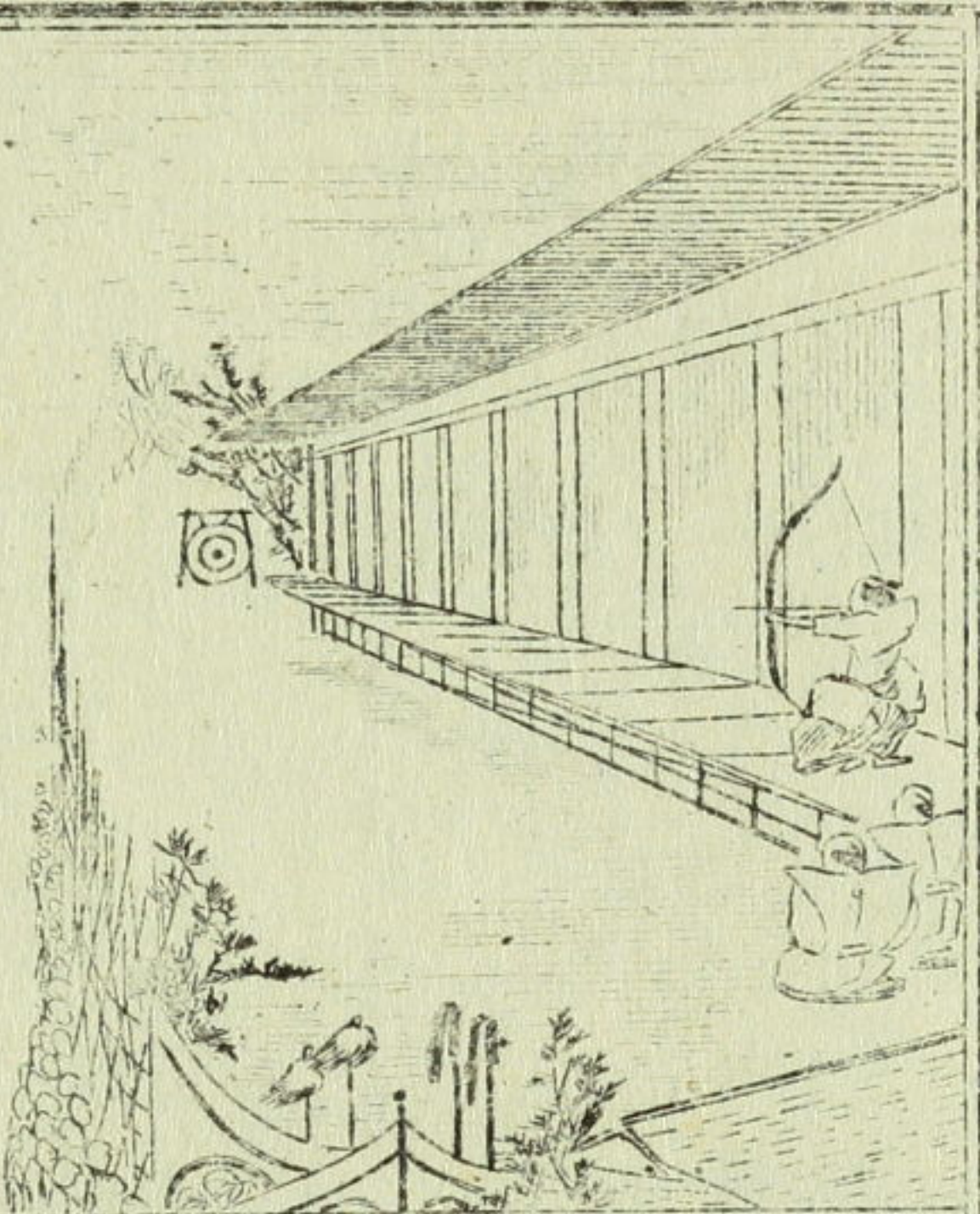
多し其湯中 阿さる 阿さる

無三春物 青芥 本朝食鑑 粒とゆくと果毛阿さる

阿さる 阿さる

阿さる 阿さる

阿さる 阿さる



東のふりも 蓮 池
西のふりも 大矢数
南のふりも 大矢数
北のふりも 大矢数

壯丹

北日 壯丹

四季 壯丹

株曳

四月 株曳

株曳 株曳

株曳 株曳

株曳 株曳

株曳 株曳

株曳 株曳

新類 伊呂波時訓新類

子規の聲を聞くは... 鳥の聲を聞くは... 虫の聲を聞くは... 風の聲を聞くは...

Table with 4 columns and 10 rows. Columns: 乱, 鴛, 鳩, 鳩. Rows: 乱, 鴛, 鳩, 鳩, 鳩, 鳩, 鳩, 鳩, 鳩, 鳩.

四季 非 階 歳 持 已 祈 祿 禱

精者... 白く... 漢三才圖會... 延喜式... 開豆... 彈初... 玉女始... 氷の様...

為章曰和名抄... 昆沙門切徳經... 常陸帶神支... 神前... 牧岡の...

四月 生類 一 日 ひと 二十七

部類 御講 歲時 訃新 講

山王祭 葵祭

神祭 近江八幡祭

中山祭 水至能

向日明神祭 湧出地主祭

山峯祭 練供粮

神衣祭 七塔祭

戒壇堂完帳花摘

夏入灌佛

佛生會 雜華會

花脚堂 甘露堂

鹿 鹿の世流二、牡鹿の北、
交り北の産む九月の子鹿、
孕雀 雀の子。

初花 花を搦りしり、
初花 花を搦りしり、
初花 花を搦りしり、

花待 花を待たせしり、
花待 花を待たせしり、
花待 花を待たせしり、

二月堂行 二月堂へ行かば、
二月堂行 二月堂へ行かば、
二月堂行 二月堂へ行かば、

同水取 水を取らば、
同水取 水を取らば、
同水取 水を取らば、

非 非を以て、
非 非を以て、
非 非を以て、

接 接を以て、
接 接を以て、
接 接を以て、

蒜 蒜を以て、
蒜 蒜を以て、
蒜 蒜を以て、

骨木花 骨木の花、
骨木花 骨木の花、
骨木花 骨木の花、

蟬子取 蟬の子を取らば、
蟬子取 蟬の子を取らば、
蟬子取 蟬の子を取らば、

和漢三式會 和漢三式會、
和漢三式會 和漢三式會、
和漢三式會 和漢三式會、



灌佛 花神堂

灌佛の 花のまゝ

身延山士朗

大田村持

佛の湯

草のついで

千園子日光祭

和哥祭花供

四季 昨昔 歳時 訃新 講

四月神秋公事 五月乾神 二月以日也 三十

鳩	瓜	茄	子
粟	壽	き	び
胡	麻	苳	苳
蚕	豆	引	莢
莧	苳	引	莢
あ	ら	ぎ	早
若	竹	今	糸
竹	植	日	阿
蟬	音	を	入
鳩	の	浮	菜
		水	鶏

鷹化の鳩 鷹を動む七首の書 鷹化の鳩 十四日臨時の書

月令仲春之 月鷹化鳥 蒲公英 木朝食鹽 俗之蘇菜と

和漢三才圖會 和名大 種浸 種井。種玉のし。

紀事二月土用の中吉日をえしひて農民田穀乃 種を水田にまきし彼處の後十日に取出し種を

おろしき種苗代としく大七日を種く苗生け

○種井のしき種をつける井のしきあり

大根の花 妻のまききき蓋を袖く

畑野山焼 余雅翼野人今歳山をやくと

札列見 公事根源 大政官より六位以下の藝

以下冠とすは式部記に 連翹 和名抄 和名以

鴨	の子	か	湯	の	こ
洗	毛	珍	相	ぬ	け
炊	鷲	羽	接	鴨	
鹿	の	子	獸	狩	
鰓	狩	照	射		
火	串	き	つ	を	
小	鱗	俎			
蟹	虫	蛇	衣	を	脱
蟻	生				
粽	食	類			
菰	ち	ほ	き		
か	ざ	り	粽		
拍					
餅					

名以多 知波世 園韓西神祭 薩州府心云 舊宮内省

西抄のつ接木 接木 和名抄 和名以

葛の若葉 大和本草 地著 衣の紋につ

燕 同巢 和漢三文並會 燕の衣衣白頸

赤黄の領之妻衣り秋去る鷹免と春種よりそ鳥

泥をつらき屋宇の下より葉をまき

祭會 涅槃像 二月の別 一掃嚴經 涅槃乃清

一切修行者所依歸 注 超脱輪廻出離生死之

地を云之死をくすあきす云 如末法七十九二

五月生数表養神歌 二月三月のねな 三十四

四季 昨昔我時七折赤黄

部類 伊諾端田訶刺草

白蓮 紅蓮 水芙蓉

荷 蓮の巻葉

蓮の實 澤 瀉

蓮の花 夕 花

風 葉 時計草

射 干 ひろくぎ

日向葵 日車 日満り

玉簪草 芍 州

眼 皮 洋の花

浮 皮 約 蓮 草

浮 皮 約 蓮 草

紙すた草

赤 草 麒麟草 青鬼灯

青 草 薰 苺 仁

絲 の 花 紫 蕪

蒜 の 花 茗 荷 の 花

麻 藍 苺

菱 苺 苺

つ く 青 田

田 草 取 小 豆 豆

瓜 系 瓜 の 花

瓜 系 瓜

四季 排踏織持記新葉草

官司の一老と巫女文子と直と是を返す神前供す

是を供すといふ又精供と云或は菜種の神供と称す

供物の上は菜花を挿む故と云ふ或は

年よりて菜花のついでに完なる時を福を推す

季脚

讀經 四次第頭書 春秋二季 百僧を南殿

各一名南殿を着て車を行く自餘は中殿

候も貞觀の時毎季とをを行く元慶の天皇踐

柞之後二季

修之と云

菊若葉 本草 苺地 苺

宿根より生るるものと又種子の立春下は二月

藝の如く始々芽を出せ二候を遅く葉は分

遺教經會 訓讀會 大報恩

寺叔迦堂の京初上立賣朱雀の西月元天台宗

近世真言宗と云ふ千本の釈迦堂是之

に若原秀衡建と云ふの堂并に年教經初年の初手

習と云ふと云ふ

風烈一板の児童の語を

前には

故と云ふ

定覚上人と云ふ

て二百五十年の

積院の傍徒を

もとの教の

仏弟子の

元海平

さきとあり

開紅

誓願寺

泉西府志

正觀寺

作之

常樂會

浮担金

傳之

六月

植物

三十九

雪乃果

水間祭

積塔

常樂會

遺教經會

菊若葉

讀經

季脚

浮担金

傳之

六月

植物

部類 伊呂波 氏言新

鞠言竹伐	上糴波祭
産广祭	巖島祭
愛宕千日詣	天満海後
橋立祭	幸崎祭
西多洗詣	西多月詣
任吉海後	任吉火番
任吉おどや	結生祭
兩乞	大後
夏ももく	夕けくへ
ももひ孝	名敷乃後
何れに後	みそ紀の後
海後川	形代

る体ハ山中 深山ノ人々 経てえり 稀きもの花
 なるにして 海にき体 して、ちりてハ 花
 散ハ 寺中 寺中 寺中 寺中 寺中 寺中 寺中 寺中 寺中 寺中
 花鎮祭 ハナシツクノハナ 全軍根源 是ハ大神狹井の二系
 馬蘭 箱頭画經 華蓮 似く長く厚し三月
 令法 設荒本草 山茶
 女子草 根細く通う 葉色一人取く 副とす
 八十八夜 立春の日より八十
 春 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花
 木瓜花 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花

芽の輪	輪 輪 輪 の 後
古もほらら	床の懸杭
小籠も神	名神楽
籠	倍々 忌日御飯
神今食	内体内ト
餅 赤内粥	節 折
雷鳴の陣	施 采
七月	部
初秋	早秋
残暑	秋の初風

註云 ありは 是未桃 して 木瓜 あり ず 近頃 木瓜
 花のあり 人々 花を 花 乃ち 木瓜
 真の末花 喜蘭花 花 花 花 花 花 花 花 花 花 花
 郭公の巢 和漢三才圖會 杜鵑ハ巢を営む
 桃花の節 凡令廣義 唐徳宗以上已
 鶏合 列子 左傳 車文類
 土佐海硯石取 難読抄 三毛吹草 三月三日

部類 御講 時記 新書

蕙	星	天	織	七	花	箱	新	ひ	初
姫	星	の	女	夕	火	妻	涼	や	嵐
百子	星	川	合	夕	七	初	初	か	又
姫	星	銀	二	た	日	月	て	律	一
	星	河	星	ふ	節		ま	の	木
	星	金		ま	句			去	
	星	河		ま				く	

「り」規石を取出しと待てて... 西寺の僧海上と到り... 領主の采地とありて... 虎の巣... 長春... 丁子草... 茶摘... 御身拭... 若蔕... 忘霜... 小寒食... 仲春禁火... 五雜俎... 七月... 三月... 四十四

七夕期

初秋や
たまたまの
垣登の妻着
まを代



文月如一人
ほしき女の子
艾の州
よの夜もやまをみりし
嵐雪
初秋の
あらしをきりし
杉風
早合や秋を詠して
山障
蚊屋に入る

四季 時記 前集

佛人の我邦... 林橋花... 御身拭... 若蔕... 忘霜... 小寒食... 仲春禁火... 五雜俎... 七月... 三月... 四十四

部類 伊呂嵐時記新草

青	蓮の実飛	粟の穂	すほひ草	茗荷の花	夕白の美	老いとてみ	受珠の花	うぐいの花	益母草	鳳仙花	頼桐	仙菊	五味子	菜少子	観音草	おとぎ草
葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉	葉

躑躅 千金翼方 羊歯の花をくく、躑躅して焚死す。故より一説に羊の性至孝、此花の赤き葉をくく、母の乳を以て躑躅して膝を折る、飲之、故より一説に山ついで、さきよの四五尺、低きもの一、二尺、枝少く、花紫く、一枝数葉、三月始り、花尻、紅あり、葉あり、五出あり、千葉を一名紅躑躅、又山柘榴、又映山紅、又杜鵑花云々。●白躑躅、一、二、三、細乳、乃、管、飯、乃、白、管、自、吾、余、尼、保、波、氏、妹、余、示、非、強、也、●羊躑躅、梓、保、保、曰、小、樹、三、二、尺、葉、二、枚、の、花、似、て、花、葉、也、瓜、の、葉、も、似、り、●和名抄、羊ついで、以、波、豆、々、之、二、云、毛、知、豆、々、之、●蓮、花、ついで、遠く、物、ハ、草、葉、の、如、し、故、より、ついで、水、草、羊、ついで、蓮、花、ついで、訓、中、藕、躑、●躑躅物の説あり、倭俗別種、●漢葱ついで、一、大、和、本草、葉、ハ、大、葉、葉、の、如、く、枝、蔓、の、如、し、小、木、之、花、も、紫、花、似、く、小、さ、く、色、は、葱、之、云、大、山、の、岩、上、に、ついで、ついで、あり、●紫、の、山、ついで、●同上、紫、花、葉、葉、木、の、ついで、一、丈、許、あり、常、の、ついで、の、三、倍、大、さ、あり、花、の、白、ハ、一、葉、三、角、片、野、中、日、光、山、中、に、多、く、土、人、を、ヤ、シ、ホ、云、云、白、花、の、も、の、を、白、ヤ、シ、ホ、云、云、●姫、ついで、洛、外、山、中、に、多、く、花、葉、紫、色、少、葉、之、●穉、路、ついで、紫、の、花、

四季	萩の上風	芒	荻	葛	瓜	陰	隠	富洲の花	菰	菰麻子	稲	室の子ませ	早	早	西	南	瓜	豆	豆	豆	草	穀精草
非	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅	菅

●**な** ●**東の花** 大和本草 其芽を出故、三月、ついで、九、葉、花、四、五、月、に、咲、き、て、●**梨の花** 三月、白花、開、く、を、み、り、六、出、の、葩、上、已、●**奈良櫻** 妙石集、奈良の村の八重桜、ときこり、わ、寺、の、別、名、之、仰、せ、く、が、様、を、め、り、多、く、は、つ、て、車、ヲ、入、り、す、り、せ、る、を、大、衆、名、を、得、る、様、を、左、右、に、す、り、解、車、あり、と、て、打、と、め、き、女、院、ま、り、め、り、て、奈、良、法、師、ハ、な、ら、ま、の、と、云、ひ、た、ま、り、ま、り、ま、り、女、衆、二、真、の、り、ん、と、云、ひ、と、云、ひ、ハ、花、様、を、

部類 俳諧 時評 新草

松	虫	人	まらむし
馬	虫	つり	させく
窠	馬	つり	させく
情	馬	つり	させく
け	く	つり	させく
稻	む	つり	させく
蟪	螂	つり	させく
秋	蟬	つり	させく
藤	く	つり	させく

抽下小花... 草餅 菓子等を焼く... 西陽雜俎 唐制三月三日侍臣... 柳の雙 細柳園を揚上を帯き... 八重桜 花葉... 山吹 花葉... 楊梅花 本朝食鹽樹高丈餘葉... 藥師寺寂勝會 七日

父	虫	蚯	蚓
田	虫	蚯	蚓
兄	鳥	鶉	鶉
小	鳥	雀	雀
撫	鷹	青	鷹
網	掛	鶉	鷹
鷹	打	鶉	鷹
鶉	打	鶉	鷹
う	け	川	原

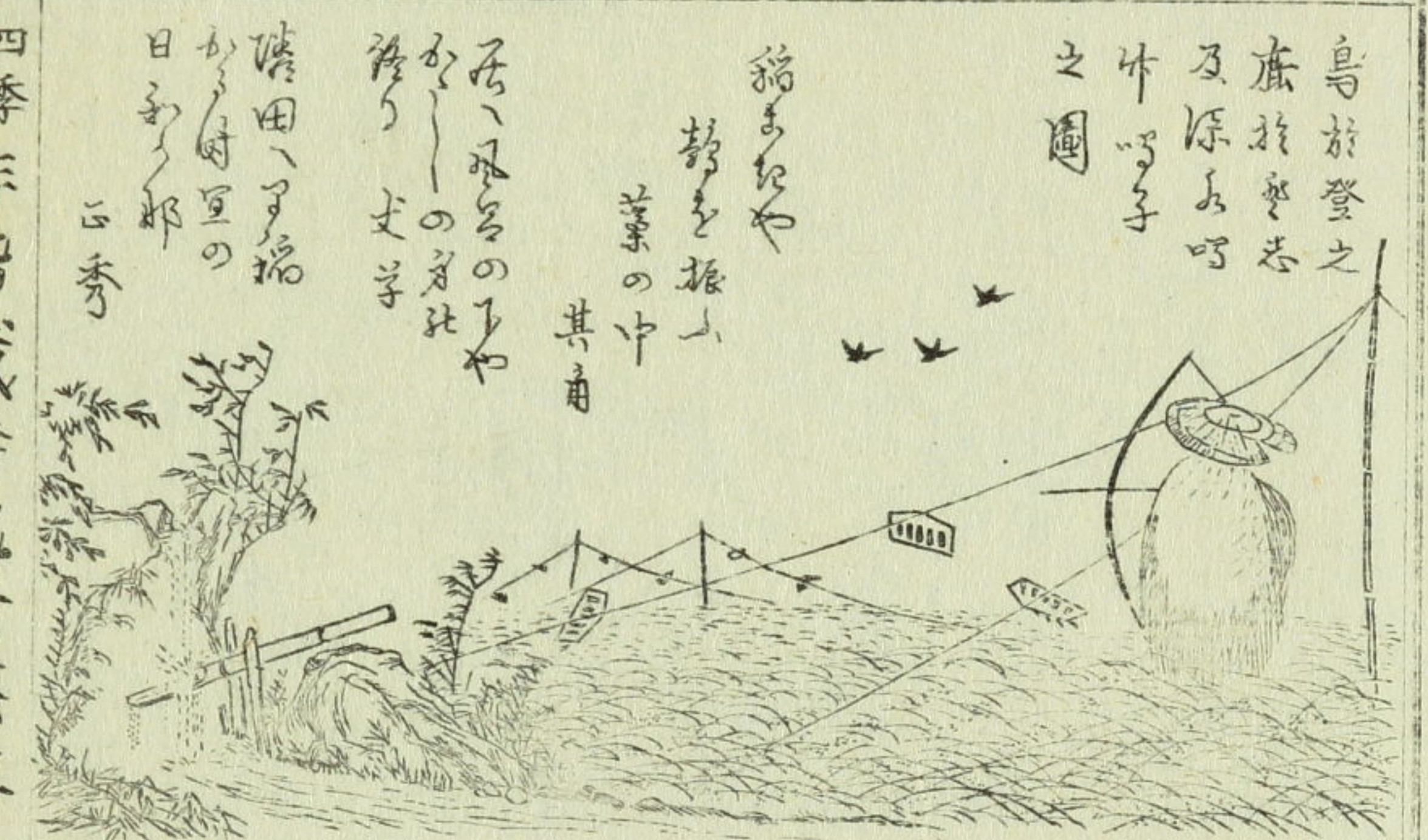
け 五形 漢名碎米蕭... 弥生山 貞徳曰... 普賢象櫻 三月廿二日 四十九

四季 俳諧 時評 新草 七月 廿二日 四十九

部類 俳諧 時記 新草

鳥のやけえ 鳥のやけえ	小男鹿 書乞森	すざろ かせま	鱧	江 鮒	鱈 たき約	い い	鮎 い	辛 むし	辛 むし
鹿	森 笛	川 ま	小 魚	沙 魚	九 万 足	九 万 足	素 山 子	素 山 子	源 水
百 舌 鳥	垣	鳥	鶴	魚	足	足	子	子	水

横川詩序 普賢堂天下第一世傳入鎌倉堂...
 賢家より訓異と花と音同...
 藤 大和本草 花春のまゝ...
 藤 木筆 二月花...
 藤 藤波...
 藤 辛夷...
 小輪園花...
 金王...
 元江戸



鳥於登之
庶於登之
及深ふ可
竹の子
之園

縮まねや
静を振ふ
葉の中
其角

居、風多のりや
か、のり
後、文字
日、のり
正、秀

谷八幡の社地...
 接 庭極一葉...
 化偷草...
 化鷄...
 浅葱接...
 踏青...
 七月生類...
 三月...
 五十

水着て細獲... 伊勢時記新草... 伊勢時記新草... 伊勢時記新草...

栗津祭... 馬酔木花... 杏花... 薊... 其繁物生ハ... 其繁物生ハ... 其繁物生ハ...

Table with 4 columns and 4 rows. Headers: 引板, 鳴竹, 鑊帛, 刺鯖. Content: 鳴子, 焼帛, 秋の狩場, 蓬の飯, 新茶の湯, 焼米, 阿川麦, ぬる麦, 和や麦, 切麦, 踊もろこ, 踊かこしら, 志のぶ石, 小野山手水, 池之切立花.

其繁物生ハ... 其繁物生ハ... 其繁物生ハ... 其繁物生ハ... 其繁物生ハ... 其繁物生ハ... 其繁物生ハ... 其繁物生ハ...

七則 衣食神歌... 三月 あさ 五十一

部類 伊諾嵐時記新翠草

居待^{十八夜} 伏待^{十九夜}

更待^{廿日} 委中^{委中}

北三夜月 去夜^{去夜}

玉兔 婊娥^{婊娥} 金波

求鞍^{水鏡} 去兔^{銀盤}

星月夜

植類類

八朔梅 初もも^{初もも}

名の木菱 梅もも^{梅もも}

木犀花 桂乃花

漆の花 銀杏

ぎくろ 葛根^{葛根} 垣

芙蓉 木ふ^{木ふ} 芋^芋

牡丹根分 芍薬根分

藍の花 山吹^{山吹}

敗荷 蒼む^{蒼む} 土記

紫菀 鬼の^{鬼の} 志^志

花野 宇治^{宇治} の花^花 園

雫 水引^{水引} の木

おしろい^{おしろい} の花 檀特^{檀特} の花

粟草 青^青 花

金剛草 去^去 夜^夜

鳥 野^野 の木

三七の花 雀^雀 麦

四季 非 落 葉 寺 巳 行 馬 草

靈元帝の御宇に及り、勅有りて、終焉を真し、祭たり、
從一位の賜多、行けり、
桃

桃花 其花或は仙と壽を
或は鬼を制して邪を祛けり

の徳をわめ、或は瓊瑤の草と稱し、
尊極子三箇を採り、大磬女を擊、惡平皆去依り、
を勅して、名つけり、枝威神富命と云、
以て、海紅を名と云、大和本草、松江府志、
源平、日月、
白く或は、
園、
一、
抄、
酒、
桃、
千、
斗、
以

大和本草 國俗、
花、
白、
園、
一、
抄、
酒、
桃、
千、
斗、
以

木蓮花 大和本草 國俗、
花、
白、
園、
一、
抄、
酒、
桃、
千、
斗、
以

世 泉涌寺開山
洛の東山、
後、
て、
と、
建、
年、
右、
十、
永、
小、
寺、
像、
宋、
刑、

善導忌
朱雀通の北限引
持寺簡魔堂に
千本念佛
朱雀通の北限引
持寺簡魔堂に
千本念佛
朱雀通の北限引
持寺簡魔堂に

八月 植物 三月 世 五十六

つゆみ菜 間引菜

中ぬき大根 粟 苳

紀 苳 苳

蜀 黍 玉蜀黍

葦 葦 持

芳村遊山

之圖

和年や

志のぬまの

まのり

まのり

山



和漢三才圖會 莞花 花葉並茂 似く小く 二月花開く

三日月花 又一種 又葉 上の視の如し 紫白の花 二種あり

紫露傘 尾のふつくさ

蘭花

射子 似く花の也 葉を抽て 葉を引く 葉を引く 葉を引く

石薺花 或石薺 葉を引く 葉を引く 葉を引く

鼻高祭 八日

梅天 社南 社南 社南

葉柳 生一即ち 葉柳

葉楓 長成 葉楓

花抽 花抽

白丁花 花抽

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

毛草 根たけ

八月 植物生数 四月は 五十八

お中け餅

水木のたしの糸木の葉の白

之木のたしち葉茶木のたしの花

山茶花復木のたし花

松風の時雨木のたし室木のたし咲

むらの栴木のたし柳

枇杷の花入木のたしッ手木のたしの花

柃の花櫃木のたしの花

冬牡丹草木のたしか木のたし

鐵宗所の神を以て此地に祠をたし蓋は神の稻食を掌るに依り里女婚をさきとすハ祭礼に必登鶏を戴て神に奉

ま不音に少社のるを嫌とあはれきハやむをえびて改く遊するものハ二枚を用ひて度降るものハ三枚を

用ひて神幸の後候も中世業平の花にまゝいりて里婦笑顔を嚮て数枚を重ぬ幣懸の故の爲に園に

胡まべまあり世に云 王孫花 名西別録王孫ハ海西川 谷五ハ汝南の城廓の垣

下生を毎時曰王孫和名あまのむすむ昔水朝のあまのむすむ明らけし今後るものあし惜哉時々毎の州にて藤

病の功最大今市園の里依 兼三麦物 津波須 王孫花と稱するもの云

此漢三國圖會鞠の小あまの五六寸のときは彼後とあつて西園にて和加奈と名する九月又許のものを眼白と云十月二

又三進きものを懸とあつて江東にてハ伊奈太と云 仲冬長三四尺をるものを懸とあつて

練供養 元津十三日十月十日大和山に當り 伊奈太の女中お姫の忌日中野船尾とあつて善心尼法如と云 法如の法草ハ惠心尼都

枯尾花木のたし

菊木のたしう木のたし花木のたし

萩木のたしか木のたし多木のたし葛木のたしう木のたし多木のたし

枯木のたし芦木のたしゆ木のたし手木のたしの下木のたし

石菫の花木のたし麦木のたし苳木のたし

蕎麦木のたし苳木のたし冬木のたし木木のたし立木のたし

水木のたし仙木のたし衣木のたし菊木のたし

冬木のたしま木のたしく木のたし 枯木のたし野木のたし

冬木のたしま木のたしく木のたし 葱木のたし

冬木のたしま木のたしく木のたし 胡木のたし煎木のたし引木のたし

水木のたし菜木のたし

四季 非皆載寺已斤菜草

兼三麦物 根芋 一云伊毛之根云須伊本根芋

山祭 神社祭儀 京三條猪熊四つり又六角堂の南 付すすくも云中山大明神と 中ハ新羅明神と云

夏木立 元帝基要 夏草曰茂草木

生節 孝陸 徳七人

兼三麦物 夏月 明

十月 植物生業 四月 ねむむ 六十八

かづけ 綿 巾 盤 上

荷 花 使 進 繼

鬼 中 心

歳 旦 祭 之 類

節 季 以 走 車 け 一 免

餅 掃 餅 餅 花

餅 掃 餅 餅 花

餅 掃 餅 餅 花

餅 掃 餅 餅 花

餅 掃 餅 餅 花

餅 掃 餅 餅 花

秋く長し 掃葉の類 似く花 月 初

日を更衣とせ 此自ら 格を用ひ 青 簾 青 簾 月 初

一説に 山のみとて ありと云ふ 一説に 秋の葉を 四月 初

和漢三才圖會 皆まゝく 一説に 秋の葉を 四月 初

大和本草 土階 兩 蛙 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

豆 打 鰯 以

寶 船 厄 拂

ば 之 の 枕 年 蕨 の 札

年 の 市 沖 杉 賣 賣

葉 竹 賣 賣 か や

飾 ね 賣 賣 門 松 以 ち 賣

年 一 本 年 木 惣

年 内 立 春 年 の 内 の 妻

年 内 立 春 年 の 内 の 妻

年 内 立 春 年 の 内 の 妻

年 内 立 春 年 の 内 の 妻

年 内 立 春 年 の 内 の 妻

年 内 立 春 年 の 内 の 妻

年 内 立 春 年 の 内 の 妻

五雜俎 大明以前 掃葉の類 似く花 月 初

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

蜀葵を以て 四月 花 木 槿 似く 蜀 葵 枝 蛙

一卷之式

賦物 貞徳云連哥五箇十箇
あり賦物百箇十箇
も極格之連云と書るべき也

蕉門云賦物の法はあしむべき也
こころのたゆみ大畧をよむべし

(まなひ草) 賦物の文字年々立字の表
を極く賦物の文字立字

たゞ文字とてあつてもさういふ
云事もあり一葉句の真の文字

をいふべき也

たゞハハハハの聲のまじりたる
たゞハハハハの聲のまじりたる

余もさういふ一文字あり二文字あり
以下百箇の例をすべし

賦何衣連哥
年毎下りていふと花はあつて

賦何袋能格
あれもやとあり何とあり世との春

こゝに上賦といふもの二語作り
つゝ字のなごりの中へあつて

後何
天の川水若うらんりりり

一字若歌
あつてなぬぬの浮世の社

是の白中の聲をまじり取あつて

二字反音
籠るる籠るる籠るる籠るる

是の白中のまじりあつて

三字中畧
まじりまじりまじりまじり

是の白中のまじりあつて

三字上畧
まじりまじりまじりまじり

是の白中のまじりあつて

三字下畧
まじりまじりまじりまじり

四季作 舊 時評 新草

行りて始り行りて終りてハ神楽のあつて

密柑の花 本草綱目 樹のまじり

短夜 明安 月令度義

水鏡 和漢三才圖會 惠曾魚正字

水鏡 和漢三才圖會 惠曾魚正字

水鏡 和漢三才圖會 惠曾魚正字

水鏡 和漢三才圖會 惠曾魚正字

水鏡 和漢三才圖會 惠曾魚正字

水鏡 和漢三才圖會 惠曾魚正字

水鏡 和漢三才圖會 惠曾魚正字

水鏡 和漢三才圖會 惠曾魚正字

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

白重 和漢三才圖會 白重表裏白堂

部類 俳言 俳語 俳諧 俳句

是の如くつづつ文字を廻して人々を悦ばせしむる

此の如く四文字上の字をたゞ一ハ難波津を上下
廻せば八文字あるやうの如く又五文字中
の字を替へて八文字あるやうの如く又二文字中
の字を替へて四文字あるやうの如く又一字中
の字を替へて二文字あるやうの如く

白雪の山の顔の花粧う那

龍門の如く都への名を輕の奥

是の如く五文字の魚を魚を以てて
と仕立しあり

他 源
是の如く五文字の魚を魚を以てて
と仕立しあり

和漢之事

大なる假借の法を
守るべし 和漢之事
に五文字を以て限るは但し漢の對する
六文字を以て限るは但し和の對する
通用するは百韻三の物の和の如く
たゞし漢の如くは百韻三の物の和の如く

万句千句十百韻

能の二巻と云ふ百韻を數の限として十巻と云
ふの如く千句と云ふ百韻を數の限として十巻と云
ふの如く十句の差別の如く十巻の如く
十巻の用字ありありあり

百韻

表八句 七句目 東十四句 九句目
表十四句 十三句目 表十四句 十三句目

三ノ折 二の表表 名残の表 二の表

同表八句 七句目

是考曰四の如きを以て名残の如くあり

采字

四季 非 昔 成 時 記 所 賦 名

胡蝶花 和漢三才圖會鳥羽 是の如く之の蝶花
あり四の如く花を以てて杖を尾の如く似
たり

胡蝶花

四千の田長 杜若の
名を以てて 蜀堯 杜若の吳名あり 蜀王本紀 堯帝
其臣龍蓋を妻を淫して乃ち其位を禪して亡きぬ時
子規ありて蜀人の杜若の啼を以てて望帝を以て
●謝豹 五難 蜀堯の差を以てて死せし人を以てて是を
以て面を覆ふ人蓋を以てて此の如く 鹿袋
角 負俗を以てて 草菌の字を以てて鹿の角初てはま
まの如く 相似たり 然るに長は二三寸 夫れを堅
らき本草云鼻を以てて嗅るは小白虫ありて鼻を以て

鹿袋

角 負俗を以てて 草菌の字を以てて鹿の角初てはま
まの如く 相似たり 然るに長は二三寸 夫れを堅
らき本草云鼻を以てて嗅るは小白虫ありて鼻を以て

角 負俗を以てて 草菌の字を以てて鹿の角初てはま
まの如く 相似たり 然るに長は二三寸 夫れを堅
らき本草云鼻を以てて嗅るは小白虫ありて鼻を以て

角 負俗を以てて 草菌の字を以てて鹿の角初てはま
まの如く 相似たり 然るに長は二三寸 夫れを堅
らき本草云鼻を以てて嗅るは小白虫ありて鼻を以て

角 負俗を以てて 草菌の字を以てて鹿の角初てはま
まの如く 相似たり 然るに長は二三寸 夫れを堅
らき本草云鼻を以てて嗅るは小白虫ありて鼻を以て

角 負俗を以てて 草菌の字を以てて鹿の角初てはま
まの如く 相似たり 然るに長は二三寸 夫れを堅
らき本草云鼻を以てて嗅るは小白虫ありて鼻を以て

新茶

新茶 新茶 新茶 新茶 新茶 新茶 新茶 新茶 新茶 新茶

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張 紙張

部類 俳諧 時評 新考

表八句 七句目 表十二句 七句目

二ノ表 二ノ表 表十二句 二ノ表

表十二句 二ノ表 表十二句 二ノ表

名残表十句 三ノ表 同表八句 七句目

七十二候

易

表八句 七句目 表十二句 七句目

表十二句 二ノ表 表十二句 二ノ表

多分の表十句 二ノ表 同表八句 七句目

表十二句 二ノ表 表十二句 二ノ表

表十二句 二ノ表 表十二句 二ノ表

新考 本朝食料 早きものハ三四月...

菫菜 和名沙草 潜確類書...

紫菀 和名紫菀 潜確類書...

蟪蛄 和名蟪蛄 潜確類書...

平野祭 和名平野祭 潜確類書...

美人草 和名美人草 潜確類書...

單物 和名單物 潜確類書...

日傘 和名日傘 潜確類書...

冷麥 和名冷麥 潜確類書...

干河 和名干河 潜確類書...

源六

五ノ韻

四十四

歌仙

表六句 五句目 表十二句 七句目

名残表 十一句目 同表六句 五句目

四季俳諧 時評 新考

四季俳諧 時評 新考

四季俳諧 時評 新考

四季俳諧 時評 新考

四季俳諧 時評 新考

四季俳諧 時評 新考

四季俳諧 時評 新考

四季俳諧 時評 新考

四季俳諧 時評 新考

四季俳諧 時評 新考

見たり... 我々の... 二理の... 抄の... 漆形... 袖の... 天... 雲... 曇...

句数 去燻

天... 雲... 曇... の類... 句数... 去燻... 同字... 表八句... 燻ふ物...

表八句 燻ふ物

神釈 燻 無常 述懐 々 旧名所

同字... 表八句... 燻ふ物... 西行... 女... 春秋... 夏冬... 四季...

長... 鳥の... 浮巢... 水... 浮巢... 浮巢... 浮巢...

鳥の浮巢

大和... 浮巢... 浮巢... 浮巢...

へ 蛇衣脱

本草... 蛇衣... 蛇衣... 蛇衣...

紅藍花

本草... 紅藍... 紅藍... 紅藍...

桃印符

桃印... 桃印... 桃印... 桃印...

蜻蛉生

蜻蛉... 蜻蛉... 蜻蛉... 蜻蛉...

虎が雨

虎が... 虎が... 虎が... 虎が...

去燻

五月へと

八十六

部類 伊諸時詩新類草

戴豆翅。山雀。日雀。四

十雀。母の秋のうらみ耳あきこれ

駒鳥。秋のうらみ耳あきこれ

裕鯉。秋のうらみ耳あきこれ

掛乞。年のうらみ耳あきこれ

野遊。秋のうらみ耳あきこれ

節供。秋のうらみ耳あきこれ

節供。秋のうらみ耳あきこれ

節供。秋のうらみ耳あきこれ

節供。秋のうらみ耳あきこれ

節供。秋のうらみ耳あきこれ

四月吉日をえり馬を給をつけ人柱を築きて

川院寛治七年五穀成龍天下泰平のうらみ

馬料を穿るる例年馬を行けぬ

臨時の執行は後世五月五日式あり

各南一の鳥居の外に於て馬を繋ぎ

をけり右左一足毎に馳せ馬を空走

らびて新馬を繋ぎを以て馬頭を

以て馬を走らせ馬を踏柳と云

元惟子と云つて端午のうらみ

夕八瀬より白旗子を舟に近代士

水の上を渡るのうらみ水面より

古法可有取捨事

杜鵑。深見草。柳。桜。鶯。

螢。蕪子花。芭蕉。蝸牛。

鶺鴒。此十品ハ家物の数量ニ古抄ニ

鶺鴒。此十品ハ家物の数量ニ古抄ニ

鶺鴒。此十品ハ家物の数量ニ古抄ニ

鶺鴒。此十品ハ家物の数量ニ古抄ニ

鶺鴒。此十品ハ家物の数量ニ古抄ニ

鶺鴒。此十品ハ家物の数量ニ古抄ニ

鶺鴒。此十品ハ家物の数量ニ古抄ニ

鶺鴒。此十品ハ家物の数量ニ古抄ニ

鶺鴒。此十品ハ家物の数量ニ古抄ニ

鶺鴒。此十品ハ家物の数量ニ古抄ニ

酢漿草花。夏月芳草を採りて秋の末迄

一葉一花を採りて葉を以て花

苗を以て二寸叢生して地を布

あし根細き葉のうらみして子あ

二粒ありて小兒中間を裂て引

戲し守蓋を以て

多角子の雄ろ

夏秋さらさら葉を以て葉を以

色卵を以て水の上を以て葉を

多し而今一古牙を以ての子を

あし根細き葉のうらみして子あ

あし根細き葉のうらみして子あ

あし根細き葉のうらみして子あ

あし根細き葉のうらみして子あ

あし根細き葉のうらみして子あ

あし根細き葉のうらみして子あ

部類 伊諸歳時記新撰草

此五品ハ人倫の修めり人倫の修めり

帝。仙洞。皇女。親王。新

院。御門。天女。天童。鬼。

佛。此十品ハ古式也。其の後何事も人倫

三白去。若菜。郭公。松虫。

水仙。水鶏。三日月。尾上。

此七品ハ會意の名目多く決して二ツハ有

雪。雨。此二品ハ雪雨二ツハ古式

虫。魚。車。馬。飯。餅。

茶。酒。此八品ハ日用の物多きハ一存

松。子の日。月。更科。花

吉野。此二品ハ連年のゆははし

鐘。鉄漿。凡木。妻。歎。

木。篠。佐々羅。累々巻

の菖。水邊。山伏。山類

夜分。此七品ハ古式の縁ハ物多きを

関仙。筵。火。轉寢。眠の

字。起の字。虫。砧。此八品

冠。烏帽子。綿。木綿。此五品ハ

夕立。雲。鷹。符。古式ハ消

白を纏らばけり今式ハ消

弥生。師走。此二品ハ古式ハ消

よ 蓬 菅 歳時記 端午 菖文を刺す小女子或ハ朝

邪を拜く 荆楚歳時記 五月五日雞卵を鳴らすハ艾の人

の形を似せるものを来り 攪てこきを取て病を去る云云

た 端午 五月五日端午の節 端午

竹 竹植日 竹酔日 晋俗 五月十三日を竹酔日とも亦竹迷

田 田植 田植歌 早乙女 早苗取 祀事 元五月の尾より六月

豆 豆引 時珍曰 莢の状老蚕の如し 故に豆引と云

つ つけ花 五月 五月 五月 五月 五月

ね 合歡の 見物云 射手装束日記云 紅入るは花

花 神農經 合歡 蜀葵 草 忘憂 〇 減 菖 〇 菖 菖

な 永根 五月 五月 五月 五月 五月

去 去 去 去 去 五月 五月 五月 五月 五月

九 九 九 九 九 九 九 九 九 九

とぞ打越を種ふハハハ古今の通式ニ

指合可有分別事

とぞと、とほま、古式ニ大車一と

子細は光親子。此二品ハ古式

今式ニハ各別 鳴子。網。花鳥

の繪。花。櫻。楓。紅葉。

古式ニハ鳴子の籠を守るハ植物ニ

とやいふハ鳴子の籠を守るハ植物ニ

去の例あり或ハ昔鳥獸の後ニ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

右の根一丈二尺のハ古今著聞集ニ

是の後冷泉院の時時之郁若門院の根合也

南天花

たマ子もハハハハハハハハハハハハ

脱皮ハハハハハハハハハハハハハハ

陽の地ハハハハハハハハハハハハハ

多クハハハハハハハハハハハハハハ

文焼ハハハハハハハハハハハハハハ

名つく瞿麥 常葉。和名抄 和名奈天之古

このを石竹と名く千弁あるハハハハ

蔓草の如クハハハハハハハハハハハ

大和撫子。唐撫子。川原撫子。鷺撫子

花の姿ハハハハハハハハハハハハハ

唐撫子の名ハハハハハハハハハハハ

の形ハハハハハハハハハハハハハハ

石竹ハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

ハハハハハハハハハハハハハハハハ

柳。櫻。馬。燕。鶯。千鳥。

花鳥有ニ物之事

鬼。虎。龍。女。

千鳥有ニ物之事

鬼。虎。龍。女。

花鳥有ニ物之事

柳。櫻。馬。燕。鶯。千鳥。

日當浦

室明神祭

蘭湯浴

夏菊

生胡桃

蘭湯浴

夏菊

いづせん 一ツの上の五文字を
く字にいうとせん

いづたいう 三句去二

はな 上句下句何れを
も今一ツをいへ

むとげ 濁音二句去二

むとげり 上句のふ留を
三句去二下句の

ふとげり だふとふと相違ハ
むとげりも不苦

ふとげり 苗と根より二句去
三句去

ふとげり 苗と根より二句去
三句去

ぬぬとぬ ぬぬぬとぬぬぬ
二句去二句去ぬぬ

ぬるとぬる 二句去あり

ぬるとぬらん 七句去二
ぬるとぬらん

るる 二句去二句去二句去
のたふひあり

るる 二句去二句去二句去
のたふひあり

又打越 又打越の詩と酒をあまへる

けり けりけりけりけりけりけり

四季 四季 四季 四季

求く相向ふ所の極うらさく産あしとて是虫
の障りあさき産あしとて〇五月廿八日とて日空ら

以下句を日空らとて是虫を行ふ日空ら産あしとて
子産子産あしとて〇神田ハ言今山とて俗天の岩戸

とて所の東の華豊宮寄に在伴の人とて此所とて
内子産子産あしとて産あしとて神ノ枝を修

も大神宮一の産あしとて神ノ枝を修
まて産あしとて産あしとて産あしとて産あしとて

宮ハ六本骨二筋を身ふたる馬の魚鮠を物り人の重き
外産あしとて産あしとて産あしとて産あしとて

楊梅 時珍曰楊梅形楊子の如くして味も似
梅に似て五月熟し紅白紫あり核細し

蛇状子 本草啓蒙蛇状子古説ヤブシラミを元つ
自別ニヤブシラミ即竊衣亦雅竊衣注

魚築打 堰本を降へる魚の往來を
通るものニヤブシラミの産あしとて

松本祭 淡海志江島大津松本村ニ神社あり松本祭
二人宮十七代仁徳天皇の願ニ難波の平野を築く

菰刈 菰刈の俗ゴマイリとて
産あしとて産あしとて産あしとて産あしとて

菰植 菰植の俗ゴマイリとて
産あしとて産あしとて産あしとて産あしとて

菰渡 菰渡の俗ゴマイリとて
産あしとて産あしとて産あしとて産あしとて

菰車 菰車の俗ゴマイリとて
産あしとて産あしとて産あしとて産あしとて

菰馬 菰馬の俗ゴマイリとて
産あしとて産あしとて産あしとて産あしとて

菰合 菰合の俗ゴマイリとて
産あしとて産あしとて産あしとて産あしとて

五月まけふ 九月十四

お 物をおもひそのもとへ又つぎせ
しふのあもつと皆二句去二

ら らしとらしし。ら

んとらん 二句去二

あん等 二句去二

う うち 二句去二

や 折をまきふとらり
あつねハ二句去二

ま まど 折をまきふとらり
あつねハ二句去二

け けし。きき 二句去二

け けり 二句去二

け けり 二句去二

け けり 二句去二

け けり 二句去二

け けり 二句去二

け けり 二句去二

け けり 二句去二

け けり 二句去二

け けり 二句去二

て てとほり 三句去二

て てとほり 三句去二

て てとほり 三句去二

て てとほり 三句去二

て てとほり 三句去二

て てとほり 三句去二

て てとほり 三句去二

て てとほり 三句去二

て てとほり 三句去二

実を結ぶを獲らふふもを藤
とつひ大なる成湯とらふあり

茶の花 綱目地衣草大明日華本草曰此乃陰濕の地日曬さる
て其苦藜ニ〇石炭時珍曰其狀花葉の如し〇玉拍

弘陶別録石上生ま松の如し

〇桑花 日本本草桑の樹の上生まる白鮮也地録花
の如し〇本邦にも亦屋上庭園石上樹上まると苦を

里に五月淋面あるとまると苦を

胡麻蒔 三句去二

豆 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

て 天南星 三句去二

四季 三

指合 五月 九十六

部類 俳言 歳時言 新刊

作花 植物ニヨク 花塗 花の

車ニ植物ニヨク 花の似らざる

数種ニ模様ニヨク 茶の花香 食

植物ニヨク 花形 小

人倫ニ 燈火の花 植物ニヨク

花うらつか 植物ニヨク

花紅葉 植物ニヨク

實之ヲ採集スルノ事ニヨク 花の似らざる

戀の詞

貞守ニ我ニ家ニハ詞ニヨク 戀ニヨク

折々則雨ふる 搜神記 金錫の性ハ五月丙子日午時

高堂語を引て云陽燄一名陽符火を言ふ

陰符水を用ふる 蓋謂を以てこを造る

五月五日を以て揚子江の水を取て

則ち佳なり 寂勝講 公事根源

四ノ大寺 東大 真福 延暦 園城

淨土清浄殿 五月一雨 梅雨 入梅 徽雨

中梅美 入梅 入梅 入梅 入梅

聞人立妻の後 東日 入梅 入梅

百三十五日 概徴雨 諸物 徽雨

あまを涌出 俗 井文 隆栗花穴

神の花

郡丹生山田の庄原の村弁天の祠

らぞ涌て廻を怒り 是則中お姫の塚

香久山の坂樹を取て 天の窟戸の事

深青にて香あり 四時廻す

白榴の種を得て ぼろぼろの事

故に安石榴 ぼろぼろの事

五月躑躅 花史 杜若花

花史 杜若花 石叢花

花史 杜若花 石叢花

花史 杜若花 石叢花

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

普積物の叙 一度ニ叙スル

さへさやましくぬらうつしきあきて

とる情 草中の志のひたふく 床の下敷き
率也川のしきまをぬ顔しとあひあう
まうまの前の作者さうつて志の心
あけまとも後の眼かまていゝ志の心
をさげぬれは彼と我との二つとまう
志を失して二つとまう

○昔も三葉門の志の初めくさう
まのちのちのちのちのちのちのちのち
まうまのちのちのちのちのちのち
作者のけいさくまのちのちのちのち
の初めまうまのちのちのちのち

○昔も三葉門の志の初めくさう
まのちのちのちのちのちのちのち
まうまのちのちのちのちのちのち
作者のけいさくまのちのちのちのち
の初めまうまのちのちのちのち

○昔も三葉門の志の初めくさう
まのちのちのちのちのちのちのち
まうまのちのちのちのちのちのち
作者のけいさくまのちのちのちのち
の初めまうまのちのちのちのち

○昔も三葉門の志の初めくさう
まのちのちのちのちのちのちのち
まうまのちのちのちのちのちのち
作者のけいさくまのちのちのちのち
の初めまうまのちのちのちのち

一説に隣国品類三百五種あり四月初より五月盛
あつをさうまのちのちのちのちのちのち

九三四里むらむ又遠く秋の山の中も
三四里むらむ隣国社花甚多し五月備山
早松草 和漢三才圖會 松草ハ九月の文を盛
さ他月さうまのちのちのちのちのち

子松草さうまのちのちのちのちのち
其味香未可なむ 蟹子 同上 倭名抄云蟹子
少虫二極まるとに蟹肉の中初め蛆を生じ
く山籠とまう身思く相黄色大一分さ
鏡をひくくさきを視るく蟹と異あるく
の子あひひくく一様二種卵生化生異あり

五月間 李沈愁霖歌云葉破苦異未林滴
曠光遠長庭沙色恨無長銀一千
儀割断頭雲看晴碧 願玉士くれの時
へぬさうまのちのちのちのちのち

騎射 年中行事云五月廿日
騎射を所覧しるくさきを馬子と云群
あひ統令儀をさうまのちのちのちのち

胡瓜 時珍曰胡瓜張騫西域使して種を得故
とまうく胡瓜と云 拾遺録云隋の大業四年
諱を避けて胡瓜を改て黃瓜と云 正二月種を下し三月
苗を生きて蔓を引て葉を瓜のくくし四五月花実く
瓜を 玉簪 和漢三才圖會 此者葉田く潤くして
結ぶ 末結の樣千のくし故まうく

名つくく五月の花さうまのちのちのち
く花の家を以て命をくく家裁く花草と云 二月
を生し 葦をさうまのちのちのちのち
葉さうまのちのちのちのちのちのち
櫻のちのちのちのちのちのちのち
今唯磨まじ圖子にて戦民用ふ

根衆辨を以て合或は云百合病を治ま故
葉短くして潤く微竹の葉を似く白花西垂の者百合
● 姫百合 時珍曰山丹を製長くして杖く
めし 紅まのちのちのちのちのちのち
して辨少く 鬼百合 時珍曰卷丹
似く 積長く 紅花を帯くく 六辨四葉上
子先結く 杜若の間まのちのちのちのち
三才圖會 花正白葩厚く大くして上
三才圖會 花正白葩厚く大くして上

情 冷き情、薄き情、情をうた
ほつき情、まげの情、まげ
いさふのあまふ
いさふのあまふ

思 物思ひ、まま思ひ、思川、
ほま思ひ、思ひの山、思ひの畑、
片思ひ、相思ひ、思ひの情、うら
まうま、思ひの劇、思ひ草、思
ひ鏡、思ひ、

涙の海、涙の雨、袖の泪、袖の露

袖の海、涙の雨、袖の雨、袖の露

恨、うらみ、山、恨の海

夢、白体、夢の道途

夢、白体、夢の道途

夢、白体、夢の道途

婿入、嫁入、婚礼

新枕、待女郎、貝桶

若後家、若衆、寺若衆、町

若衆、男色、美少年、小々姓

念者、男色、美少年、小々姓

念者、男色、美少年、小々姓

愛まじしと山溪間より出くを得く

車百合、同上

車百合、同上

車百合、同上

車百合、同上

車百合、同上

水鳥の巢、浮葉、宇量鳥穴

水鳥の巢、浮葉、宇量鳥穴

水鳥の巢、浮葉、宇量鳥穴

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

神水、金門記、重五

契、ちまりの末、あご、まきり

契、ちまりの末、あご、まきり

契、ちまりの末、あご、まきり

契、ちまりの末、あご、まきり

契、ちまりの末、あご、まきり

契、ちまりの末、あご、まきり

越瓜、時珍曰、越瓜地を以て

越瓜、時珍曰、越瓜地を以て

越瓜、時珍曰、越瓜地を以て

越瓜、時珍曰、越瓜地を以て

越瓜、時珍曰、越瓜地を以て

越瓜、時珍曰、越瓜地を以て

身たしあま。 独處。

人目。人目の関。人目を思ふ。

目之を世。神祈。憂別。

うき人。色。老好。色。

ちり。うき名。もろ名。あま

名。あま名。あま名。思ふ名。

待。待曾。すう人。すう人。

鏡。十寸鏡。姿見鏡。占。占方。

は占。口占。灰占。夕卦。夕占。

夕暮。夕暮。初めてまら人の初をもて思ふ人の吉凶を占ふを云ふ。

形見。出家落。 隨流を云

坊主。坊主。坊主。坊主。

行。行。行。行。

中。中。中。中。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

あま。あま。あま。あま。

花四葉。白し葉の臭まろし。家園。植まら

の枝。根をちり。飯の上。

園史。金然。根の三。尺。葉。生。似。似。似。

菱の花。時珍曰。菱。一名。菱。葉。支。支。支。支。

如。五月。小白。花。日。日。日。日。

合。皆。坑。土。日。日。日。日。

批。批。批。批。

移。移。移。移。

毛。毛。毛。毛。

葉。葉。葉。葉。

葉。葉。葉。葉。

の花。藻。藻。藻。藻。

二。二。二。二。

毛。毛。毛。毛。

水。水。水。水。

世。世。世。世。

石。石。石。石。

時。時。時。時。

一。一。一。一。

上。上。上。上。

収。収。収。収。

住。住。住。住。

意。意。意。意。

五。五。五。五。

百。百。百。百。

二。二。二。二。

二。二。二。二。

二。二。二。二。

二。二。二。二。

父あし子 結ぶの神

懸垂文書 一月けの部

水つとくひ 一月みの部

赤陸帯 一月ひの部

筑六鋤 四月つゝの部

雜喉症 十二月をの部

新ぼとく 子をあらさ

仇とく 実情は

垣間見 かのを

虫の印 印を

を動かせる 博物志

田植 行ふに相傳ふ神功皇后三韓を征

八閩通志 食貨部云其品類一ありす白李亦書黄と名づく

立夏 節 五月之部

芒種 節 五月之部

夏至 節 五月之部

仲夏 茂林 皋月 鶉月 橋月 月をぬり 早苗月

五月 立夏 節 八十八夜 菊地祭 靖國祭

六月の忌火脚飯 以御臺盤一脚供之次供脚飯脚菜四種和布脚汁一杯

公事根源 内宿司より奉まを大床子の脚座を供ま

佐伯郡宮島より所の神三座有并高城神田心

推古天皇二十二年十二月敷聞(達)社を營之嚴淨大

用さるを呼或は地景の美を以て稱も當社後八原

山前ハ蒼海左ハ原野右ハ松原と稱も此ハ洗井

徳之詞 六月 百三

四季 俗言 神田 言 新 言

後とく 書を

中とく 書を

後とく 書を

後とく 書を

後とく 書を

後とく 書を

幸して... 伊勢時記新纂

○... 伊勢時記新纂

ぬく... 伊勢時記新纂

身をたがす... 伊勢時記新纂

嬰切... 伊勢時記新纂

るい... 伊勢時記新纂

信を... 伊勢時記新纂

昔ま... 伊勢時記新纂

花物の怪... 伊勢時記新纂

後め... 伊勢時記新纂

長枕... 伊勢時記新纂

近ま... 伊勢時記新纂

近ま... 伊勢時記新纂

忘れ... 伊勢時記新纂

四季... 伊勢時記新纂

と名く蓋... 伊勢時記新纂

池の所... 伊勢時記新纂

奏し... 伊勢時記新纂

亡く... 伊勢時記新纂

真也... 伊勢時記新纂

を扱ひ... 伊勢時記新纂

泉... 伊勢時記新纂

泉殿... 伊勢時記新纂

神泉... 伊勢時記新纂

水を改... 伊勢時記新纂

四月... 伊勢時記新纂

産を繁... 伊勢時記新纂

曰予... 伊勢時記新纂

年予... 伊勢時記新纂

水草... 伊勢時記新纂

一説... 伊勢時記新纂

標之花... 伊勢時記新纂

百四

部類 伊言 岸田言 新言 草

青楼。妓門。娼門。浮身宿。

同叙。妓家。揚屋。遊女。

うかき女。流の君。傀儡女。

樋君。雛妓。宿女。夜登。辻

君。女郎。たきき女。一夜書。

傾城。傾城。傾城。傾城。

禿。禿。禿。禿。

鶉老。鶉老。鶉老。鶉老。

あげ。あげ。あげ。あげ。

はげ。はげ。はげ。はげ。

編笠。編笠。編笠。編笠。

部類 伊言 岸田言 新言 草

求部平の故秦の東陵候之秦止ひて布衣とぬきふ負くく

瓜を長安城の東に種瓜五色ありて美二世と云ふ瓜と

女又支那の瓜と東門青門をど

のふあまの瓜と平平の故事あり

稿突。稿突。稿突。稿突。

心太。心太。心太。心太。

竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

天皇天平三年。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

中。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

若。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

志。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

曉傘。曉傘。曉傘。曉傘。

女樂。女樂。女樂。女樂。

七人。七人。七人。七人。

野郎。野郎。野郎。野郎。

飛子。飛子。飛子。飛子。

神媒。神媒。神媒。神媒。

神媒。神媒。神媒。神媒。

神媒。神媒。神媒。神媒。

神媒。神媒。神媒。神媒。

神媒。神媒。神媒。神媒。

神媒。神媒。神媒。神媒。

求部平の故秦の東陵候之秦止ひて布衣とぬきふ負くく

瓜を長安城の東に種瓜五色ありて美二世と云ふ瓜と

女又支那の瓜と東門青門をど

のふあまの瓜と平平の故事あり

稿突。稿突。稿突。稿突。

心太。心太。心太。心太。

竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

天皇天平三年。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

中。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

若。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

志。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

志。竹生鳥祭。竹生鳥祭。竹生鳥祭。

曉傘。曉傘。曉傘。曉傘。

女樂。女樂。女樂。女樂。

七人。七人。七人。七人。

野郎。野郎。野郎。野郎。

飛子。飛子。飛子。飛子。

神媒。神媒。神媒。神媒。

神媒。神媒。神媒。神媒。

神媒。神媒。神媒。神媒。

神媒。神媒。神媒。神媒。

神媒。神媒。神媒。神媒。

神媒。神媒。神媒。神媒。

四季

四季

四季

四季

四季

四季

四季

四季

又二割 和蘇中へ送るに以てとて

なん (あゆみ抄)

世にひのちんちんといひつけたまふと噂と
と種らうの祖とさういふとさういふと
とる詞をあらふる

ん (同上)

今も夜とよりうらまをさう
とるさういふ

らん (同上)

そんちのまもといふたのあつらふと
るさういふとさういふとさういふと
ニアラウといふと

らん (同上)

らんといふはさういふとさういふと
との世にうらまをさういふと
とるさういふと

箱根越人もあつらふとさういふと

らん (同上)

けの字もいふとさういふと

は (同上)

世の中はたさういふとさういふと
とるさういふと

ま (同上)

行すといふとさういふと

め (あゆみ抄)

そんちのまもといふたのあつらふと
るさういふとさういふとさういふと
ニアラウといふと

相國寺懺法

世に閻を懺法といふと云わぬの致し紙の禿者寺の法堂
あり是を依て本氏より寺附とて此の寺に
家郷の墓

二度清社へ所帯を奉らせ

牛頭天王の祭之尾張國海部郡門間の庄藤波の里に
村家傳記 致取天宮に奉りて

めあふの對も降る後尾張の國郡の郡の
地の名をよめて

洞をさういふとさういふと

神島とて後神民の一日に

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

紀事 六月十七日 洛の相國寺

閻上とて懺法を修す

六月十二日

六月十四日

六月十五日

六月十六日

六月十七日

六月十八日

六月十九日

六月二十日

六月二十一日

六月二十二日

此の川のまをてさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

切字

名越後

神祇 名越後とてさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

あつらふとさういふと

景清も花見の筆に七巻
むしきけはたまたま重なる

益置之格

梅白し時を雀を益すれ
高ら木に影中くまも梅の花

益讀之格

山吹や宇治の結帯の白く
まろはしの飯糰とんめり

置字之格

さう長七重七堂仙益八重極
兼一と益あやうよの床の山

時宜之格

梅白し時を雀を益すれ
高ら木に影中くまも梅の花

時宜とてさるる時人
三井秋風うらやまを
あつとあつとを林和清
時宜とて後の一章の

を着し山刀を佩帯と
本を行を舟波と好し
を揚て山刀を以て
西國の山をよるも
て後を竹切と云
松提寺繼禎和尚
經持念を一蛇
を籠まへしと
仙舟 是二寺
山岸延和尚
の遠忌會之夜
あせし
迷意

一本の竹を返り
法好者十人
その趣を
の趣を
又隨て
雄の
謂く曰
清泉
中興

社詩 寺
陶酒詩
草の
和漢三
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

絶代に都々息とあ
ありふる意の
弘氏の王此道の
るる

賀の格

先程へ梅をんのを
うらやまの杖突板を馬外

雑の格

あまのこ誰か
夏草式今梅
の情をうつし
とゆは

押字

何の木の花を
上へ何と
さへ

四季
俳諧
時記
新草

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

雀の
雀の
雀の
雀の
雀の

西く三四の折と氷引を祝ふの蓋の上と正ま二二の折をまゝく入る

表六の月日に出る時七の月日に出る時

四季神歌をのたまふ

七代孝靈天皇五年は海國地新

膚草為螢

舟遊

氷餅祝

四季神歌をのたまふ

満尾の上端

筆を待右の捺

四季神歌をのたまふ

毛吹草

需故

金痂子

天満御後

部類 伊諸歲時記新採草

○其類 服袴の事

昔も初〜とて、夏も初〜とて、秋も初〜とて、冬も初〜とて、

服は初〜とて、靴は初〜とて、

市中ハ初〜とて、門〜とて、

是其場ニ

登白ハ女の月ノ懸ニ市中ハ燕向〜
物の〜とて、

奉て食ふ赤
白の二種あり

○祇園會

七日 神社啓蒙二
十二社註式人

皇六十四代、融院天祿元年六月十四日脚靈會を付〜

今歲より是を行ふ〔祀事〕先七日の朝大祥六本若四

条通東、渡も若六本の祥祿号あり、長刀鉾、函谷

鉾、月鉾、菊水鉾、雞鉾、故下鉾、又山鉾本町、若手

四季形、出〜とて、此鉾毎年の例〜

頂〜とて、病愈〜とて、此鉾毎年の例〜

身一番〜とて、此鉾毎年の例〜

二十四日山八本三本通の西〜

内縁、海河、十四日幸社〜

美麗〜

古例あり〜

圓融院の所掌六月十五日始〜

中務の使左少将若原理兼左右馬五匹あり〜

衛の官人供奉も〜

崇徳院天治以後毎年お繰り〜

〔傳説〕今日九度詣〜

〔傳説〕今日九度詣〜

〔傳説〕今日九度詣〜

〔傳説〕今日九度詣〜

是其場ニ

登白ハ女の月ノ懸ニ市中ハ燕向〜

物の〜とて、

市中ハ初〜とて、門〜とて、

是其場ニ

登白ハ女の月ノ懸ニ市中ハ燕向〜

物の〜とて、

市中ハ初〜とて、門〜とて、

是其場ニ

登白ハ女の月ノ懸ニ市中ハ燕向〜

四季 非諧歳時記新採草

聖廟此地遷座の日あり〜

用るやや〇天曆元年六月九日始〜

木耳取 時珍曰木耳朽木の上生〜

麒麟草 漢名赤苺〜

景天の別種〜

金の銀血 赤色の産〜

如し銀血 赤色の産〜

月令此月土潤溽暑大雨時行〜

由已法橋山谷詩〜

書始〜

顔 赤く顔を早〜

山梅園愛宕那乳或ハ云海〜

の宮〜

附合

六月 ゆみ

百廿一

字留まるといふは泪の跡とぬらふ
る残れ白の雪とまゝなるは泪とぬら
たましく心ゆくまゝなるは泪とぬら
かたまりの二句を尾しては三句は
をるるまゝなるは泪とぬらとぬら
をるるまゝなるは泪とぬらとぬら

是相對の涙とく階を有心二

冬を去る月曾穂に入敷うあ
ぬく者狂うまきき腸

盤白の月の光りのまゝなるは泪とぬら
たましく心ゆくまゝなるは泪とぬら
かたまりの二句を尾しては三句は
をるるまゝなるは泪とぬらとぬら
をるるまゝなるは泪とぬらとぬら

服いの幸のやうに盤白の雪とぬら
かたまりの二句を尾しては三句は
をるるまゝなるは泪とぬらとぬら
をるるまゝなるは泪とぬらとぬら

ワキまゝに階のうへあはてをむら
よはぬまゝあり

六韻の俳諧

盤の足難 匠長と沈そく
這より以て 狂子 可見矣

○或は古人の遺句をまゝに臨するにつ
れは 俳諧なり 是を眼奪りといふ

花の後すのちなるまゝなり 女白あり 古
その花をまゝに袖の春梅

此盤白のまゝなるは花の香くぬら
ぬらぬらまゝなるは花の香くぬら
ぬらぬらまゝなるは花の香くぬら
ぬらぬらまゝなるは花の香くぬら

眼はまゝなるは花の香くぬら
ぬらぬらまゝなるは花の香くぬら
ぬらぬらまゝなるは花の香くぬら
ぬらぬらまゝなるは花の香くぬら

四月十七日 暑も房前不き 暑はさるる
熱をまきまきぬるの故に 民も恩沢を
十一年より十七日迄 三日夜の
熱をまきまきぬるの故に 民も恩沢を

薄暑

季夏土潤の薄暑にして 注云 薄ハ濕之上の
薄暑なり 薄ハ濕之上の 薄暑なり

水の時を好むまゝなるは泪とぬら
たましく心ゆくまゝなるは泪とぬら
かたまりの二句を尾しては三句は
をるるまゝなるは泪とぬらとぬら

白梵天

和州田村の梵天此
梵天は和州田村の梵天此
梵天は和州田村の梵天此

油造

和州田村の梵天此
梵天は和州田村の梵天此
梵天は和州田村の梵天此

氷室

日本紀に徳天皇六十二年五月額田の
大中法皇皇子聞鶏 獵も時 皇子山上

置大山王を呼ぶと云を問て曰す 射中なる何の窟を
注して曰氷室ある中 射中なる何の窟を

氷のむらもの 氷は水のおももの 氷は水のおももの

氷室の雪 氷室の雪は氷室の雪は氷室の雪は

氷室の雪 氷室の雪は氷室の雪は氷室の雪は

一夜酒

公事根源 一夜酒は一夜酒は一夜酒は

さうさうとてふふを挨拶と云
すめくく花の枝とて去現在を云
五の何のくまををいひあせり
我のいふさうしと感懐を起し今
さうさう袖をぬくまをありと款
して袖の春を結ひたるもの
花と云字者と云字者句と云
をワキと云其の二字をせし
る極装りの体あり

又羨望の句ありてさうさうさうさう
えいさうの神海と云さうさうの
字をさうさうと云
叔ワキと云其の句ありてさうさう
つげと云さうさうと云さうさう
さうさうと云さうさうと云さうさう
さうさうと云さうさうと云さうさう
さうさうと云さうさうと云さうさう

○遺物 遺物 遺物 遺物
遺物 遺物 遺物 遺物
遺物 遺物 遺物 遺物
遺物 遺物 遺物 遺物
遺物 遺物 遺物 遺物
遺物 遺物 遺物 遺物
遺物 遺物 遺物 遺物
遺物 遺物 遺物 遺物

是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云

磯一造り 磯九升を得此を以率とせ日つらと
一度ふぬ 磯の起り七の三十日と云く日つら
六升

鎮火祭 公事根源 卜部氏の入ををうさて宮城
の四ツまきりて祭をせしめありて祭を祭す

日威 杜甫昔熟行日祝融南
來鞭文龍火旗燭々燒

火蛾 俗名 火蛾 俗名 火蛾
火蛾 俗名 火蛾 俗名 火蛾

百日紅 植物論
百日紅 俗名 百日紅 俗名 百日紅

鼓子花 俗名 鼓子花 俗名 鼓子花
鼓子花 俗名 鼓子花 俗名 鼓子花

瓢花 時珍
瓢花 俗名 瓢花 俗名 瓢花

莫 俗名 莫 俗名 莫 俗名 莫
莫 俗名 莫 俗名 莫 俗名 莫

瓜 俗名 瓜 俗名 瓜 俗名 瓜
瓜 俗名 瓜 俗名 瓜 俗名 瓜

世絶米 公事根源 絶米 東山西山
北山ありて世絶の山寺に傳

蝉の脱 是蝉退 俗名 蝉の脱
蝉の脱 俗名 蝉の脱 俗名 蝉の脱

御夜 同火替 俗名 御夜 俗名 御夜
御夜 俗名 御夜 俗名 御夜

涼堂 俗名 涼堂 俗名 涼堂 俗名 涼堂
涼堂 俗名 涼堂 俗名 涼堂 俗名 涼堂

是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云
是を向附と云

まの... けも後も... 西日の... 菘人の...

菘の... 西日の... 菘人の...

菘の... 西日の... 菘人の...

菘の... 西日の... 菘人の...

菘の... 西日の... 菘人の...

菘の... 西日の... 菘人の...

菘の... 西日の... 菘人の...

菘の... 西日の... 菘人の...

菘の... 西日の... 菘人の...

菘の... 西日の... 菘人の...

六月之解

菘六月 林鐘 大暑 季夏 氏期

菘六月 陽水 風待月 鳴神月 常夏月 水無月

六月 芒種 丹生川祭 貴船祭 東照祭



